

ウイグル語における動詞人称を示す形式

藤家洋昭

大阪外国語大学

huziie@osaka-gaidai.ac.jp

Reyihan Pataer

新疆師範大学／甲南女子大学

reihan@konan-wu.ac.jp

1. はじめに

ウイグル語は、言語のタイプとしては、動詞文末型の膠着語であり、語順などの面で日本語とよく似た特徴がある一方、日本語とは違い、人称を示す形式が非常に発達している言語である。

ウイグル語の述語動詞の一人称は、人称を表す形式を伴うのが普通である。この、述語動詞に付く、人称を示す形式は、大きく2つのグループに分けられることが知られているが、それらの文法的な違いについてはあまり詳しく記述されていない。

本研究では、ウイグル語における人称を示す形式を記述し、ウイグル語の動詞人称を示す形式は「語尾」と「付属語」の二種類があること、そして、ウイグル語には三人称というカテゴリーはないという説に異論を唱え、三人称が存在することを主張する。

2. 人称を示す形式の基本データ

本章では、ウイグル語の人称を示す形式についての基本データを見、どのような種類があり、どのような特性をもっているかを観察する。

ウイグル語の動詞人称を示す形式は、動詞に後続し、形態素の切れ目がはっきりしているのが普通である。

次のようになる。

Aqsudin kældim.

アクス（尊格） 来た（一人称単数）

「私はアクス（地名）から来ました。」

Hazir kældiñiz mu?

今 来た（二人称単数）か

「あなたは今来たのですか。」

これら、人称を示す形式は、2つのグループに分けることができる。すなわち、次の2グループである。

	単数	複数
一人称	-m	-q
二人称	-ñ, -ñiz	-ñlar, -ñizlar
三人称	なし	

	単数	複数
一人称	-mān	-miz
二人称	-sān, -siz	-silār, -sizlār
三人称	-du	

前者をA類、後者をB類と呼ぶことにすると、直前に来るテンス・アスペクトによってA類、B類のどちらが用いられるかが決まる。すなわち、過去形 -di にはA類が、それ以外の、現在形などにはB類が後続する。

例

A類

bardim 「私は行きました」（過去）

B類

barimān 「私は行きます」（非過去）

きわめて単純な例においては、これら二つの形式の間の違いは小さいようにも見える。両者はともに、動詞の後に接続し、形式の切れ目もはっきりしている。一人称単数形が -m で終わり、二人称複数形が -z で終わるなど、形そのものが似ていないこともない。

しかしながら、よくみていくと、これら二つの間にはさまざまな違いがある。

表面的には、B類は、三人称を示す形式がある一方、A類では三人称は無標であるという事実の他、アクセントの違いがあることをあげることができる。

注目すべきに、疑問文における、疑問を示す形式と

の位置関係がある。

例

(A類) Bardiñiz mu? 「あなたは行きましたか。」

人称 疑問

(B類) Baram siz? 「あなたは行きますか。」

疑問 人称

すなわち、A類では、人称が先に、一方、B類では人称が後に来る、という違いがある。

さらに、B類は少し複雑で、一人称では人称が先に、すなわち人称-疑問の順に、一人称以外では疑問が先で人称が後に、すなわち疑問-一人称の順番になる。例：

一人称

Män mu mäktäpkä barimän mu?

人称 疑問

「私も学校へ行くんですか。」

二人称

Ätä mäktäpkä baram siz?

疑問 人称

「あなたはあした学校へ行きますか。」

このように、A類とB類の性質が異なることは明らかである。

3. 分析の枠組み

本研究の分析の枠組みは、HPSG (Head-driven Phrase Structure Grammar, 主辞駆動句構造文法) [1] によっている。ただし、主辞が右側に位置する等、ウイグル語にあわせた独自の改変をおこなっている。

4. 分析

本章では、2章で見た、人称を示す形式のふるまいの多様性が何によるものなのか、3章で概略を示した枠組みを用いて説明する。

ウイグル語における人称を示す形式のうち、本研究でA類と呼んでいるものと、B類と呼んでいるものは、従来の研究では、どちらも‘ek’「語尾」と呼ばれることもあるが[2]、A類を「語尾」、B類を「付属語」と呼んで区別する場合もある[3]。これは、単に呼び方が異なるというだけでなく、人称を示す形式の性質のとりえ方の違いであると考えなければならない。本研究では、2章であげたデータの考察をもとに、A類は語

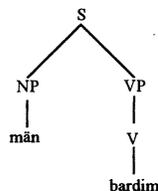
尾、B類は付属語、であるという仮説のもとに分析を進める。

この仮説の前提として、次のような命題がある。

- ・語尾とは語の一部である。
- ・語には形態的緊密性という性質があり、語を統語的に分断したり、語の内部に統語的な要素がはいることはできない[4]。
- ・付属語とは語の一種であり、独立した存在である。

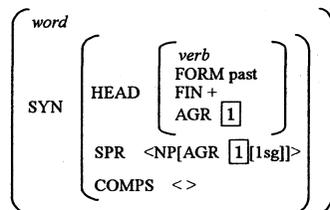
前述した仮説にしたがい、Män bardim 「私は行きました」(=A類)の構造を(1)のように仮定する。

(1)



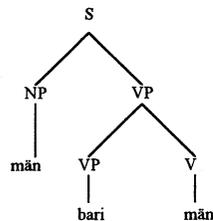
“bardim”は、1語であると分析し、語彙項目は(2)のようになる。

(2)



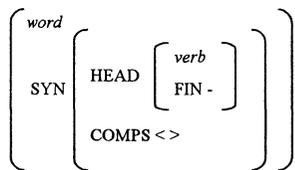
一方、Män barimän 「私は行きます。」(=B類)の構造を(3)のように仮定する。

(3)

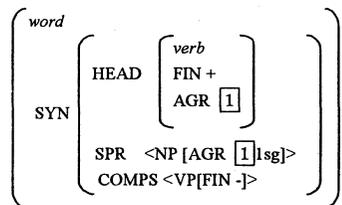


つまり、barimän は、2語からなっているという分析である。bari と män の語彙記述はそれぞれ(4),(5)のようになる。

(4)



(5)

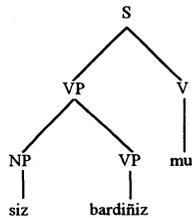


bari-は、bardim と違って SPR が不完全指定である。

ここまでをまとめると、A類のものは語尾、つまり語の一部、B類のものは語であるというのが本研究の分析である。これは、文献[3]の主張と同じである。ところが、文献[3]では、ウイグル語には文法の枠組みとして三人称はないとしている。本研究の分析では、A類が付き得る動詞形、例えば過去形は、人称を示す形式ではなく動詞そのものが AGR をもっている。すなわち、人称を示す形式が付いていないものは、3rd という情報をもっている。したがってウイグル語の動詞過去形には三人称形が存在するということができる。

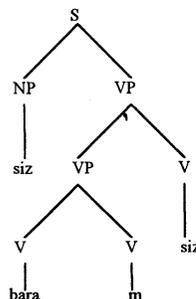
次に、疑問文における、人称を示す形式と疑問を示す形式の、順序の問題を考えてみよう。まずは二人称からである。2章でみたように、A類とB類では、人称を示す形式と疑問を示す形式の順序が逆になる。この現象が記述されなければならない。Siz bardifiz mu? の構造は、(6)のように仮定される。

(6)



対して、Siz baram siz? の構造は、(7)のように仮定される。

(7)



A類は、語尾、すなわち語の一部、この場合は bardifiz の一部であるので、-fiz だけが分離して、どこか別のところに付く、ということは語というものの性質からして、ありえない。これに対しB類のものは、語尾ではないから、そのような制約はない。-siz だけが離れて別のものに付くことが可能である。

2章で見たように、ウイグル語のB類の人称を示す形式は、人称によって人称と疑問の順番が逆になる、ということである。すなわち、一人称に関しては、人称-疑問の順番に、その他の人称では疑問-人称の順番になる。例：

一人称

(8) a. Män barimän mu? 「私が行くのですか。」

b.*Män baram män?

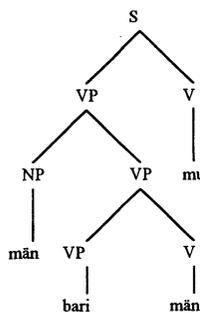
一人称以外

(9) a. Siz baram siz? 「あなたは行きますか。」

b.*Siz barisiz mu?

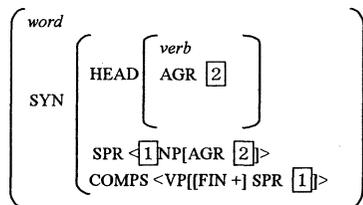
Siz baram siz の構造は、先にあげたとおりであるが、Män barimän mu? の構造を(10)のように仮定する。

(10)



そして疑問を示す mu の語彙項目を次のように仮定する。

(11) mu



(8),(9)にあげた例の文法性と非文法性を説明するために、-mu, -mān, -sizにどのような共起制限があるが直接記載するのもひとつの方法かもしれないが、できればより一般化すべきである。ここでは、muのCOMPSの素性を用いることを考える。A類では、疑問形は、常にmuが後続する形で形成される。我々の分析では、A類(の形式を持つ動詞)はFIN+であるので、muはCOMPSにFIN+を指定しているとすることができる。この、A類とともに現れるmuとbarimān mu?のmuは同じものであると考えるのが自然であろう。そうすると、B類の一人称のものは、FIN+であると考えられる。一方、B類で一人称以外を示す形式は、FIN-であるとすることができる。が、FIN-とはいったい何であろうか。課題が残る。

同様に、*baram mām?がなぜ非文法的かということを考えて、māmはCOMPSにFIN-を指定していて、bariは、FIN-なので認可され、bardiなどはFIN+なので阻止されるとする。そうすると、baramはFIN+ということになるが、FIN+とはどういうことであろうか。課題が残る。

4. さらなるデータ

本章では、前章での分析をさらなるデータについて検討し、われわれの分析が適当であることを示す。

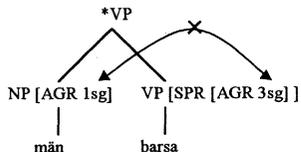
ウイグル語では、述語でない動詞の形(副動詞形・連用形・接続形)に、それ自身の独自の主語を持つものと持たないものがある。それらの文法性の違いを人称という観点から説明する。

* Mān barsa Tursun barmaydu.

私 行けば(人称形式なし) トウルスン 行かない
barsaのような-sa形は、人称を示す形式としてA類のものとする。したがって、われわれの分析によると、barsa

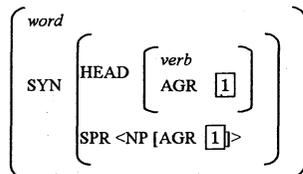
はAGR 3rdである。主語のmāmはAGR 1sgであるから、単一化することができず、排除される。

(12)



一方、表面的には同じように三人称に見える、つまり人称を示す形式がない、kālgiča「来るまで」は、三人称ではない。したがって主語と単一化でき、mām kālgiča「私が来るまで」は認可される。

(13) kālgiča



これは、ウイグル語には三人称というカテゴリーが存在し、表面的に人称が無標のものとは区別されるといふ本研究の分析でこそ説明可能である。

5. 結論

以上、ウイグル語における人称を示す形式の文法的ふるまいの違いを見、記述した。まとめると次のようになる。

ウイグル語の人称を示す形式は、人称「語尾」と「付属語」という文法的性質の異なる2種類のものにわけられる。ふるまいの違いは、語の一部であるか、独立した語であるかということによる。

ウイグル語には三人称というカテゴリーを認める必要がある。

参考文献

- [1] I. A. Sag and T. Wasow. *Syntactic Theory*. CSLI 1999.
- [2] R. Öztürk. *Yeni Uygur Türkçesi Grameri*. Türk Dil Kurumu, 1994.
- [3] 竹内和夫. 現代ウイグル語四週間. 大学書林, 1991.
- [4] 影山太郎. 文法と語形成. ひつじ書房, 1993.